



馬 耳 東 風

東京葛飾の柴又で八幡神社境内の古墳から発掘された埴輪が、渥美 清さんが演じる映画「男はつらいよ」の「寅さん」にそっくりだと評判になった。帽子を被り目が細くいかにも寅さん似だ。おまけに奈良東大寺の正倉院宝物の戸籍に刀良と佐久良売の名前が見つかったというから、偶然とはいえ因縁が感じられるようで面白い。埴輪は、3世紀後半から6世紀後半にわたって王など権力者の古墳に並んで立てられた。素焼きの土製品は、王を取り巻く人々の生活を今に伝えている。

さて、動物埴輪は形象埴輪の愛らしき満点のまさに動物賛歌の品々だ。馬具を付けた飾り馬は、権威の象徴として実に見事な造りだ。朝鮮半島からの渡来人の働きが大きかったことは日本書紀などの記述で明らかである。明治天皇陵の伏見御陵では、四体の武人埴輪が石室四隅に鎮座している。絵葉書となった組写真「伏見桃山御陵」に載せられている。いかにも古墳時代の群馬県に出土が多い挂甲の武人がよみがえったようにみえる。挂甲の武人は、胴を防護するために小札を紐で組み合わせた胃で横方向を綴じ、縦方向を威して伸縮する。完全武装した像はかつて切手の図柄にもなった。

昨年末に開催された東京国立博物館挂甲の武人国宝指定50周年記念特別展「はにわ」の盛況ぶりが改めてうなずける。馬具の制作も伝わり半島と共通の変化がみられる。権力者の象徴として熊谷市上中条から発掘された馬は、鞍や鐙、雲珠・辻金具、杏葉、轡の両端の鏡板などを付けた見事な飾り馬だ。大阪高槻市の今城塚古墳出土の牛型埴輪は、がっちりした筋肉体型でいかにも労役

そのものに見える。牛は元来日本にはおらず、稲作とともに大陸から伝わったとされる5世紀ごろに登場した。日本書紀の記述にも5世紀頃から登場し、安閑2年(536)難波で牛の放牧を命じている。

一方、日本へ鶏が伝わり飼育されるようになったのは、弥生時代にさかのぼることが明らかになった。真岡市出土の鶏型埴輪は、動物埴輪の中で出現が最も古く弥生時代にさかのぼり、夜明けを告げる鳥として登場する。

魂を運ぶ水鳥や邪を避ける鶏、食料としての猪、狩人を見据える雄鹿、狩猟のパートナーとしての犬、鳥や魚等まさに古代芸術の世界を堪能する。群馬県天神山古墳出土の口を開けて舌を出して見つめる愛らしい犬型埴輪は、実に造形に優れて写実的だ。卑弥呼の時代といわれる3世紀前半の纏向遺跡(国史跡)から出土の犬の骨から3次元レプリカをつくって骨格を組み、体高48 cmの柴犬より一回り大きい、頭の小さい犬が復元された。狩人に追われ振り返る鹿は、愛嬌たっぷりの余裕を見せている。背中に矢の刺さった猪もいる。人の役割分担から腕を振りながら踊る埴輪、盾持人のさまざまな表情、力士のトゲ付沓、おしゃれな出で立ちで杯をささげる女性、馬子や鷹匠など埴輪に残された当時のさまざまな姿や表情の変化に引き込まれる。遙かな時代をさかのぼり古墳時代の人々の埴輪に託された喜怒哀楽の生き様がみえてくる。

群馬県では、榛名山の噴火に伴い、古墳時代当時の生活の跡がそのまま埋没して遺跡として残された。これらの遺跡の発掘の結果この時代に生きた甲を着た古墳人骨や最古級の埋葬馬が発見された。蹄跡から木曾馬級の放牧地が想定されている。馬を使う文化や技術が早い時期の東国にあったことがうなずける。(柏)